

1 8月10日は真昼の空襲(注1)

昭和20年8月10日正午前、新潟がグラマン戦闘機(注2)の攻撃を受けた。以前から幾度もB-29(注3)の空襲を受けたが、たいていは夜、機雷を投下し、港を封鎖する攻撃であった。空母から発進したグラマン戦闘機16機(新聞報道)が港内の船舶を襲い、「おけさ丸」をはじめ何隻かが被弾し、50人位の死傷者が出た。

この銃撃じゅうげきの時に、戦闘機せんとうきが何機も私どもの頭上ずじょうを通った。(注4)

少々の怖いもの見たさもあって、部屋の窓から見上げると、戦闘機せんとうきの操縦士そうじゅうしと目が合うような恐怖を感じ、押入れの布団の下で息をひそめていた。この時、隣町では歩いていた人が電柱かげの陰かくに隠れると、戦闘機せんとうきは引き返して来て、電柱かくに隠れた人を狙って銃撃じゅうげきし、もう生きた心地がしなかったという。

そのくらいの低空を戦闘機せんとうきは飛び回り、さも動く標的ひょうてきを狙う射撃訓練ねらをするように撃つ感覚に、聞いた方もゾツとした。

この頃「次の原爆投下は、新潟が目標だ」と、噂うわさが広まり、翌11日に「全市民緊急疎開命令そかい」が出、たった1日で街がもぬけの殻から状況になり、不気味で不思議な街に一変いっぺんした様子を忘れることはない。(注5)

(注1) 8月10日の空襲

1945年(昭和20年)8月10日午前11時45分頃、アメリカ軍の戦闘機が新潟飛行場、工場、船、民家に対し機銃掃射やロケット弾攻撃をしました。

佐渡汽船の貨客船「おけさ丸」や陸軍軍用船「宇品丸」が被弾し多数の死傷者が出たほか、西堀前通10番町と11番町の間の風間小路や新潟鉄工所入船工場でも死傷者が出ました。

この時の空襲で新潟市周辺で死亡した人は、現在わかっているだけで、兵士を含め47名です。

出典：戦場としての新潟

(注2) グラマン(F6Fヘルキャット)

アメリカの航空機会社グラマン社が製造したアメリカ海軍の艦上戦闘機。第二次大戦中の海軍主力戦闘機。

(注3) B-29

第2次大戦中に登場した、アメリカの大型爆撃機。4基のエンジンをもつ。ボーイング社製。日本への空襲はほとんど本機により行われ、広島・長崎への原爆投下にも使われました。

(注4) 中村さんは、当時浮洲町に家があったとのこと。

信濃川河口から近く、当時家の窓から覗くと、たくさんの戦闘機が飛んでいるのが見えたとのこと。

(注5) 一斉疎開

中村さんは、母と弟、妹を新潟市外の疎開先へ預け、自身は役人であった父と共に新潟市内の自宅に残っていたとのこと。

8月11日は、新潟市の戦死者合同慰霊祭<sup>いれいさい</sup>が公会堂で予定されていた日だった。私の兄も対象の1柱<sup>はしら</sup>（注6）であり、参加するために、私は勤労働員<sup>きんろうどういん</sup>（注7）先（富山県高岡市）から、10日の朝9時頃自宅に帰りついたところだった。9日に高岡駅を出発<sup>しゅつぱつ</sup>。車窓から見える富山、長岡両市の惨状<sup>さんじょう</sup>は、臭気<sup>しゅうき</sup>と煙の記憶と共に今も消えない。

富山市の空襲<sup>くうしゅう</sup>（8月1日）を我々（学徒動員生）は、隣の高岡市から見ていた。

B-29の大編隊<sup>だいへんたい</sup>が大雨を降らすように焼夷弾<sup>しょういだん</sup>を投下する様を目にした。燃え上がる炎で、B-29は巨体の腹を赤々と反射しながら低空を悠々と飛び、街を焼き払う<sup>げいげき</sup>。迎撃<sup>むげき</sup>の日の丸機は、1機も飛ばない。

地上からの曳光弾<sup>えいこうだん</sup>（注8）の弾道<sup>だんどう</sup>は、B-29まで届かない。なす術<sup>すべ</sup>も無く、暗闇<sup>くらやみ</sup>の中で燃え盛る火を無言で見ているだけだった。

この最中に「新潟も今やられている」との噂<sup>うわさ</sup>が広まってくる。（こういう噂<sup>うわさ</sup>は速くすぐに広まる）

「新潟もこんな風にやられているのか？俺の家も、今燃えているのか？」と気がもめるがどうしようもない。ほどなくして「新潟ではなくて長岡がやられているそうだと伝わってくる。長岡が、今眼前の富山市のように燃えているのか」と思うと複雑な混乱の状態にいた。

この両市を9日の帰省時の車窓<sup>しゅつぱつ</sup>から見た時にも余燼<sup>よじん</sup>（注9）が目鼻に届いた。壊れたコンク

（注6） 柱  
死者の霊を数えるのに用いる。

（注7） 勤労働員  
中村さんは、富山県高岡市の日本曹達高岡工場で、鉱石からアルミニウムを作る仕事をしていたとのこと。  
工場内は、薬品があったり、電気が通っていたりして、危険な場所であったとのこと。  
中村さんは、そこで1年ほど働いたとのこと。

（注8） 曳光弾  
弾道や着弾点がわかりやすいように、弾底から光を放ちながら飛ぶ弾丸。

（注9） 余燼  
火事などのあとに燃え残った火。くすぶり。燃えさし。

リーの建物や折れ傾いた電柱。「ここに大勢の人がいたのか？」と信じがたい惨状だった。

## 2 建物強制疎開<sup>そかい</sup>（注10）

横七番町は、緊急防火対策ということで、建物の強制疎開<sup>そかい</sup>地域に指定され、道路の拡<sup>かく</sup>幅<sup>ふく</sup>が施行（昭和20年7月）された。私は、8月に高岡市から帰省<sup>きせい</sup>のおりに、その変わり様に驚いた。下<sup>しも</sup>町<sup>まち</sup>の小さな商店街ではあるが、映画館（新潟館）や自転車店などが並んでいて、子供心にも嬉しい町だった。とりあえず、板で断面<sup>ふさ</sup>を塞ぐような家々が並び荒れた町に変わっていた。次の予定地域もあったが、終戦の混乱で立ち消えになった。

## 3 終戦直後

17日早朝に、ソ連軍が上陸してくるとの噂<sup>うわさ</sup>が流れたが、夜が明ける頃にはデマとわかる。

夕方、日の丸戦闘機<sup>せんとうき</sup>（注11）が1機飛来して、ビラ<sup>ま</sup>を撒<sup>ま</sup>く。「この度の休戦は、閣僚<sup>かくりょう</sup>などが赤魔<sup>せうりやく</sup>の謀略<sup>まうりやく</sup>に掛かりての事にして、畏れ多くも聖明<sup>せいめい</sup>を覆<sup>おお</sup>い、下国民<sup>あざむ</sup>を欺<sup>あざむ</sup>きしものにして断固<sup>だんこ</sup>従<sup>したが</sup>うべきに非<sup>あら</sup>ず。我等<sup>われら</sup>、あくまで戦う必勝<sup>ひっしょう</sup>の確算<sup>かくさん</sup>あり」との文意だった。

同感の人、不安げな顔の人など様々だった。

新潟<sup>くわしゅう</sup>や富山の空襲<sup>くわしゅう</sup>の時には、日本軍機は1機も飛ばなかった。

（注10）建物強制疎開

新潟市内では、1943年（昭和18年）10月、防空壕や公共待避所を設置。1944年（昭和19年）11月から国民学校高等科、中等学校の生徒や町内会、隣組を動員して防空壕を増設。1945年（昭和20年）3月には、9、621の待避壕がありました。また、東京大空襲（3月10日）以降、家々の塀の取り壊しも始まり、各家々の防空壕を誰でも使えるようにし、家々の空き地をつないで広くし、火災から逃げやすくしました。家の中では屋根を突き抜けた焼夷弾が天井板に止まって火をつけないように、天井板を取り外しました。

同年5月からは、強制的に建物疎開を開始。空襲によって起きる火災から重要な施設・工場・鉄道を守り、消防道路を確保することを目的に、防火区域として空き地を作るもので、建物を取り壊し、住民も疎開させました。

出典：戦場としての新潟

（注11）日の丸戦闘機（零戦）

旧海軍の「零式艦上戦闘機」の通称。太平洋戦争直前に完成。航続距離が長く、軽快で運動性に富み、当時の世界水準を抜いた単座の高性能戦闘機。

中村さんは、学生であったが終戦の混乱で授業どころではなかったとのこと。

海が近くで、他にやることもないので、海岸へよく行っていたとのこと。そこで軍用機が山の下方面から青山方面へ飛んでいく際に、ビラを撒いて行ったとのこと。

ビラの内容は、人が拾ったのを覗いたので、詳しく覚えているわけではないが、おおよそ左記のような文面であったと思われるとのこと。